

P23

歯科衛生士学校学生の小児への対応における自信度についての検討

○石通宏行 松下愛 医)コアラ小児歯科

【目的】小児歯科臨床においては知識、理解、判断、また、手技や技能の獲得だけでなく、対人関係能力の修得も重要である。当院では某歯科衛生士学校の小児歯科の臨床実習先として学生を受け入れ教育の一端を担わせて頂いている。このたび石川の作成した、歯科衛生士から小児への対応における自信度アンケートを用い臨床実習の教育成果の評価、分析の判断材料としての可能性について検討を行ったので報告する。

【方法】当院で小児歯科の臨床実習を受ける衛生士学校の学生を対象とし、臨床実習前と当院での臨床実習終了時に歯科衛生士から小児への対応における自信度アンケート調査を行った。実習期間は2週間で、実習はガイダンス、見学、診療補助、実地指導、と実習、課題レポートのほか、設定した課題でのロールプレイを行った。

【結果】歯科衛生士から小児への対応における自信度アンケートは10の設問からなり、自信度は1から10のスコアで自己評価を行うものである。実習前の平均スコアは3.4 (SD7.4)、実習終了時の平均スコアは40.8 (SD13.1)、平均スコアの上昇は平均6.8 (SD12.9)であった。設問ごとの平均スコアは実習前で2.4から4.3、実習終了時で2.9から5.2であった。設問ごとのスコアの変化は0.37から0.94ですべての設問で平均スコアは上昇していた。

【考察】今回の実習前の平均スコアの3.4は石川の報告による衛生士学校学生の平均スコア34.7 (SD12.2)とほぼ同じであり、実習終了時の平均スコアの40.8は同じく石川の臨床経験を持つ歯科衛生士の平均スコア62.5 (SD21.2)より低い値を示した。今回の対象の平均スコアの上昇は臨床実習の経験が小児への対応の自信度向上につながったものと考えられる。

P24

幼稚園集団歯科検診結果と当院における歯科検診結果との比較

○得丸千聖、河口綾乃、山本誠二、松三友紀*
やまもと小児歯科・矯正歯科クリニック

*岡山大学医歯学研究科行動小児歯科学講座

【対象】幼稚園通園児で集団歯科検診（以後集団検診）受診者かつ当院受診者（以後院内検診）で資料の検討が可能な園児52名を対象とした。

【方法】幼稚園における集団検診結果および当院カルテより集団検診日に最も近い院内検診を行った検診表を資料とし、比較検討を行った。なお、当院での院内検診では無影灯のもと通常の口腔内検診のほか乳臼歯部間はデンタルフロスを使用し歯間部のザラツキおよび糸のほつれ等を触診するとともに、レントゲン写真にて歯間部の実質欠損を有する齲蝕の有無を評価した。統計方法は χ^2 検定およびt検定を使用した。

【結果】集団検診での齲蝕罹患率は、dfで44.2%、df+C0で46.2%であるのに対し、院内検診では、dfで73.1%、df+C0で96.2%であった。また、一人平均齲蝕経験本数は、集団検診において、dfでは2.5本、df+C0で2.7本に対して、院内検診で、dfで5.9本、df+C0で7.9本であった。集団検診と院内検診との間の全ての指標において統計的に有意差が認められた。

【考察】当院は医療機関であり疾患を有する患者が来院していることが多い。本結果より、本対象者は当院検診よりC0を含めればほぼ齲蝕を有することが示された。集団検診では検診時間に制限があるととも光源が不十分等の不利な条件がつかまうことは言うまでもないが、集団検診においても5割の対象者に齲蝕を有することが示される結果となった。逆に、半数の園児が問題なしとの判断が下されたことを意味する。日常臨床のなかで予防のために当院を受診した保護者の中に、多くの齲蝕を保有しているのにもかかわらず学校および幼稚園での検診で齲蝕がないとの指摘をうけ口腔内に問題がないと思っている保護者が多くいると感じられる。口腔内の予防を行うには初期の状態より把握することは必要であり専門による口腔内管理が重要となる。本調査より、学校および幼稚園における歯科検診は一次スクリーニングであることを保護者に説明できる結果が示された。